



埼玉県におけるチュウゴクアミガサハゴロモの発生について

埼玉県病害虫防除所 さかい 酒井 かずひこ 和彦・たかはし 高橋 りょう 諒

はじめに

チュウゴクアミガサハゴロモ *Pochazia shantungensis* (CHOU and LU, 1977) はカメムシ目ハゴロモ科に属する昆虫で、1977年に中国山東省から記載された (CHOU and LU, 1977)。日本国内では2015年に初めて大阪府で確認され (KOBAYASHI et al., 2024)、その後、国内での発見が相次ぐようになった。日本国内での農作物被害は神奈川県で初めて報告され、同県から病害虫発生予察特殊報 (2024年8月14日) が発表された (神奈川県, 2024)。その後、同年10月31日に埼玉県でも特殊報が発表され (埼玉県, 2024)、以降、2025年8月24日までに福岡県、山梨県、東京都、群馬県、熊本県、富山県、千葉県、奈良県、大阪府、栃木県および香川県の計13都府県で特殊報が発表されている (発表順)。また、特殊報を発表していない県でも本種の発生が確認されており (早瀬, 2024; KOBAYASHI et al., 2024)、今後の農作物被害の拡大が懸念される。

ここでは、埼玉県におけるチュウゴクアミガサハゴロモの発生状況と生態について紹介する。

I 埼玉県における発生経過

2024年9月ごろより、県内のチャ農家より「見慣れないガのような茶色い虫が多数、茶園にいる」「細い枝に白い綿状のものが多く付着している」との情報が相次いで寄せられるようになり、成虫および被産卵枝を園地で採取した。一方、カンキツやブルーベリー、カキなどの果樹で本種によると思われる産卵痕が県内の複数地域で確認され、県北部では切花シュッコンアスター (シオン属の園芸種) でも本種によると思われる産卵痕が確認された。2024年10月に採取した成虫および被産卵枝を農林水産省横浜植物防疫所に送付、同定を依頼した結果、

The Occurrence of Arien Ricaniid Planthopper *Pochazia shantungensis* (Hemiptera: Ricaniidae) at Saitama Pref. By Kazuhiko SAKAI and Ryou TAKAHASHI

(キーワード: チュウゴクアミガサハゴロモ, 発生生態, 農作物被害, 加害植物)

成虫は本県での発生が未報告であったチュウゴクアミガサハゴロモであることが確認され、2024年10月31日付で病害虫発生予察特殊報を発表した (埼玉県, 2024)。

特殊報の発表後も本種による産卵痕 (図-1) が多くの植木類や花木類で確認され (表-1)、きわめて広範囲の植物に対して産卵を行うことが確認された。

なお、埼玉県内で本種による農作物被害を確認したのは2024年であるが、既に2023年には県南部の植木類で発生していたとの情報もあり (植竹, 私信)、埼玉県内には2023年以前に侵入していたものと考えられる。

II 埼玉県における本種の生態

本種は、韓国では年1化性、中国では年2化性とされる (EPPO, 2021) が、発生生態は十分に解明されていない。以下、2024年秋季から2025年8月上旬にかけての本県における観察に基づき解明された本種の生態を述べる。年間の世代数については推定を含む。

1 生活史

越冬は卵により行われる。越冬後の卵は4月下旬以降気温の上昇とともに孵化し、幼虫は5~6月にかけて各種の植物から吸汁して生育し (図-2)、5齢を経過する。幼虫は活発に歩行するほか、刺激を与えたり触れたりすると跳躍して逃亡する。幼虫は各齢期とも腹端から分泌した白色ロウ状物質をまとい、腹端を中心に放射状あるいはクジャクの尾羽状に広げる。このロウ状物質は密で、姿勢によっては幼虫の腹部のほとんどが覆い隠されるような状態となり、降雨や外敵などから虫体を保護しているものと考えられる。また、このロウ状物質は物理的な刺激等によって虫体から離脱し、脱皮時には新たに分泌されることによって更新される。

6月中旬から新成虫が出現し、7月初旬には本種による産卵が確認されている (図-3)。産卵は長期間にわたって行われ、7月上旬から8月中旬にかけて、継続して新鮮な産卵痕を確認している。7月上中旬に採取した被産卵枝や被産卵部位を室内で管理していたところ採取10日後には1齢幼虫が観察され、この時期の卵は産卵から10日~2週間程度で孵化するものと考えられた。野外で